

四柳白山下遺跡Ⅲ

個人住宅建設にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書



▲四柳白山下遺跡が所在する邑知地溝帯中央部から北に香嶋津を望む

1994

石川県羽咋市教育委員会

四柳白山下遺跡Ⅲ

1994

羽咋市教育委員会

四柳白山下遺跡発掘調査

目 次

	頁
例 言	V
第1章 遺跡とその周辺	1
第2章 調査に至る経緯と経過	7
第1節 第3次調査に至る経緯	7
第2節 第3次調査の経過（日誌抄）	8
第3章 第3次調査の概要	9
第1節 第3次調査区の設定	9
第2節 土層の概要	10
第4章 遺構と遺物	12
第1節 遺構の概要	12
第2節 各 説	12
(1)柱穴および小穴 [P1～10]	12
(2)用途不明の遺構 [SX01]	12
(3)畝状溝 [SU01～08]	12
第5章 出土遺物	15
第1節 古代の遺物	15
(1)須恵器	15
(2)土師器	22
(3)製塩関係の土器	22
(4)土製品	26
(5)石製品	26
(6)金属の生産と加工に関する遺物	26
第2節 中世から近世の遺物	26
第6章 調査の成果と課題	27
第1節 遺構と遺物の検討	27
第2節 まとめ	28

写真図版目次

本文対照頁

図	版 1	邑知地溝帯と四柳白山下遺跡（羽咋砂丘上空から）	1
図	版 2	四柳白山下遺跡俯瞰	1
図	版 3	(1)第3次調査区遠景（南西より石動山系を望む）	7
		(2)第3次調査区遠景（南東より眉丈山系を望む）	7
図	版 4	(1)第3次調査区近景（南東から）(2)重機による表土除去作業（南東から）	8
図	版 5	(1)人力による掘進作業（南東から）	8
		(2)人力による遺構掘り下げ作業（北東から）	8
図	版 6	(1)SU05～08検出状況（東から）(2)掘り上がったSU05～08（東から）	10・12
図	版 7	(1)D・E～3・4区遺構検出状況（南東から）	10・12
		(2)掘り上がったD・E～3・4区2（南東から）	10・12
図	版 8	(1)掘り上がった柱列（北東から）(2)掘り上がった柱列（南東から）	12
図	版 9	(1)SX01検出状況（南東から）(2)SX01中心部（北東から）	12
図	版 10	(1)掘り上がったSX01（西から）(2)SX01断面（南から）	12
図	版 11	須恵器 蓋	15
図	版 12	須恵器 蓋・有台坏	15
図	版 13	須恵器 有台坏	15
図	版 14	須恵器 無台坏	15
図	版 15	須恵器 甕・壺・横瓶	15・22
図	版 16	土師器 甕	22
図	版 17	土製品・石製品	26
図	版 18	上段－中世から近世の遺物／下段－柱根	12・26

表 目 次

	頁
第1表 周辺遺跡地名表1	5
第2表 周辺遺跡地名表2	6
第3表 調査区土層分類表	10
第4表 須恵器坏蓋・相關散布図(口径・器高)	16
第5表 須恵器坏蓋・口径分布表	16
第6表 須恵器有台坏・相關散布図(口径・器高)	16
第7表 須恵器有台坏・口径分布表	16
第8表 須恵器有台坏・相關散布図(口径・台径)	16
第9表 須恵器有台坏・体部外傾度分布表	16
第10表 須恵器有台坏・相關散布図(台径・台高)	17
第11表 須恵器無台坏・口径分布表	17
第12表 須恵器無台坏・相關散布図(口径・器高)	17
第13表 須恵器無台坏・体部外傾度分布表	17
第14表 土師器甕・口径分布表	17
第15表 四柳白山下遺跡出土土器・器種構成	27
第16表 四柳白山下遺跡出土土器・用途別構成	28
第17表 四柳白山下遺跡出土土器観察表1	31
第18表 四柳白山下遺跡出土土器観察表2	32
第19表 四柳白山下遺跡出土土器観察表3	33
第20表 四柳白山下遺跡出土土器観察表4	34

挿 図 目 次

	頁
第1図 位置と地形概念図	1
第2図 調査区周辺採集支脚実測図	3
第3図 四柳白山下遺跡と周辺の遺跡分布図	4
第4図 第3次調査区域図	7
第5図 第3次調査区グリッド割図	9
第6図 調査区土層断面図	10
第7図 調査区遺構平面図	13
第8図 柱根実測図	14
第9図 須恵器実測図1	18
第10図 須恵器実測図2	19
第11図 須恵器実測図3	20
第12図 須恵器実測図4	21
第13図 須恵器実測図5	22
第14図 土師器実測図1	23
第15図 土師器実測図2	24
第16図 土製品・石製品実測図	25
第17図 中世から近世の遺物実測図	26
第18図 第1～3次調査区位置図	29

例 言

1. 本書は、石川県羽咋市四柳町に所在する「四柳白山下遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、個人住宅建設にともなうもので、羽咋市教育委員会が実施した。調査に係る費用は国庫の補助による。
3. 調査は、羽咋市教育委員会社会教育課主事今井淳一・同嘱託牧山直樹が担当した。また庶務は同係長沢通則があたった。
4. 調査期間は平成5年4月12日から5月25日まで延べ24日間を要した。
5. 出土遺物の整理にあたっては、遺物洗浄・接合・記名・実測・トレース作業を牧山直樹・楠みち子・能山真登加・里見節子、図版作成を今井淳一・牧山直樹、写真撮影を谷内碩央がそれぞれ分担した。
6. 遺構・遺物の挿図に対する指示は下記のとおりである。

- (1) 挿図の縮尺は掲載のスケールで示した。
- (2) 方位はすべて磁北を示している。
- (3) 水平基準は海拔高を示している。
- (4) 写真図版の遺物には通し番号を付し、本文中の挿図番号に一致する。
- (5) 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、その他の土器類を白ぬきで示した。
- (6) 遺構の略号はつぎのとおりである。

土坑 [SK]・畝状溝 [SU]・用途不明の遺構 [SX]

7. 調査によって得られた資料は、羽咋市教育委員会が一括して保存管理にあたっている。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々や機関からご教示・ご協力をいただいた。以下にご芳名を記して深甚の謝意を表したい。(敬称略・順不同)

浜岡賢太郎 四柳嘉章 小嶋芳孝 垣内光次郎 北野博司 木立雅朗 川畑 誠
 石川県教育委員会 石川県立埋蔵文化財センター 石川県埋蔵文化財保存協会
 四柳町町会 大町町会 酒井町町会 金丸出町会 下曾祿町会
 羽咋産業建設株式会社 羽咋市歴史民俗資料館

9. 本報告書の執筆分担は、つぎのとおりである。

今井淳一 第1章・第3～6章

牧山直樹 第2章

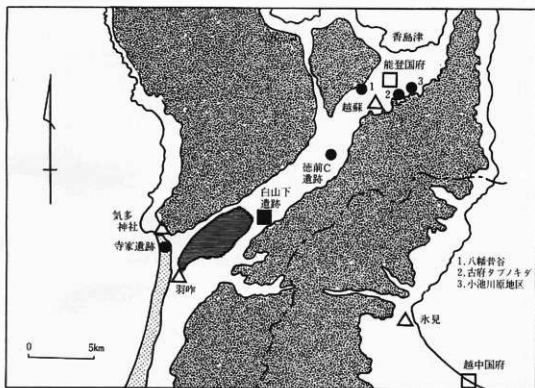
10. 本書は今井淳一が編集した。

第1章 遺跡とその周辺

古代における能登国は石川県の北半部、日本海に大きく突き出た能登半島をその領域とし、養老二年（718）二月に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡が分離して一国の扱いをうけている（第一次立国）。そのなかでも最大の生活舞台としてあり続けているのが邑知地溝帯と呼ばれる細長い沖積地であり、半島基部南西端の羽咋から北東端の七尾まで平均幅約5km、長さ25kmの半島横断路として、各時代の文化形成に大きな役割をはたしている。

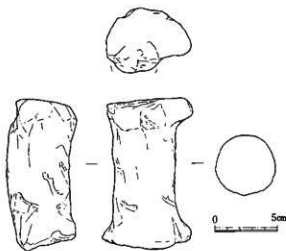
四柳白山下遺跡はこの地溝帯の中央部南寄りに位置し、旧邑知潟（干拓前）北東岸にあたる扇状地上に展開している。また、文献史料によれば、このあたりは古代の官道（駅路）に指定されており、加賀国の深見駅で北陸道の本路から支路が分岐して、地溝帯南側の石動山系丘陵の山麓沿いを北上していく道筋にあたっている。

さらに、『延喜式』巻二十八、兵部省の「諸国駅伝馬」条は加賀国の横山駅に続いて能登国に撰才、越蘇の二駅、各五足を記しているが、このうち、撰才駅の遺称地とされているのが、現在の羽咋市余喜地区であり、『日本地理志料』や『石川県史』では式内社の餘喜比古神社が鎮座する大町および本遺跡が所在する四柳町周辺に撰才駅を想定している。余喜地区は『和名



第1図 位置と地形概念図

類聚抄」記載の能登郡与木郷に比定される地域で、この郷名の初見といわれる「越前国能登郡真荷里」と記された平城宮出土木簡に、和銅六年（713）と紀年銘が入っていることから、少なくとも律令体制初期の段階には、越前国に属しながらも地方行政の末端区画として編成されていたことがうかがわれる。また、能登における官道（駅路）設定の時期は明かではないが、前述した第一次立国の段階には機能しはじめたようである。



第2図 調査区周辺採集支脚実測図

一方、余喜地区周辺は昭和二十年代に実施された耕地整理の際に、かなりの量の考古資料が出土したことも知られていたが、平成元年（1990）と翌二年（1991）に行われた本遺跡の第一・二次発掘調査からは、当時の状況を探る上で貴重な考古資料が得られている。

特に、検出された掘立柱建物は三度にわたる同一地点での建て替えであり、建物以外の遺構である配石や柱列、溝なども主軸方位の同一性に基づいて配置されたものであった。これらの建物の柱穴掘形やその他の遺構および包含層から出土した墨書土器

を始めとする土器群の型式は8世紀前半代を示しており、官衙的な遺跡の性格に加えて、律令体制下で能登国が第一次の立国をしたのち、天平十三年（741）に越中国へと併合され、天平勝宝九年（757）に再び分立（第二次立国）するという経過のなかで、与木郷域内にも集落が成立し、存続していたことの積極的な傍証となっている。

また、邑知地溝帯を縦走する形で事業が進行している国道159号鹿島バイパス改築工事によって、本遺跡の北東方向（0.5～1.5kmの範囲内）でも小金森ヘイナイメB遺跡、曾祢C遺跡、高島カタ・スギモト遺跡など古代の集落跡が石動山系の山麓沿いの緩斜面上で次々と確認・調査されており、当時の官道に沿って展開した人々の営みが想定される。

こうした交通路沿いの集落分布状況に対して、本遺跡の北西約1km、邑知地溝帯の中央部に位置している大町C遺跡からは、平成三年（1992）の発掘調査によって、「大町」と記された墨書土器や横板井籠組の井戸などが確認されており、9世紀後半から10世紀前半にかけて旧邑知溝に接した湖上交通の集落が存在したことは確実であろう。

羽咋郡の郡家と能登郡の郡家および能登国府を結ぶ官道（駅路）沿いで、旧邑知溝に面するとともに、両郡の接点にあたる本遺跡周辺は、古代の能登国や邑知地溝帯を考える上において注目される地域であり、考古資料と文献史料との一致が期待される地域といえる。

註

- (1) 筆者が行った聞き取り調査によれば、土器以外の資料が出土したことも間違いないところであるが、当時の出土資料はほとんど確認されていない。わずかに註2文献で紹介した四柳町在住の四坂弥一氏が本遺跡周辺で採集された「文(交?) 易」「田地」「田地八十」と記された墨書土器やその他の須恵器・土師器片が知られるにすぎない。

また、図2に掲載した支脚は、筆者が昭和62年(1987)に第3次調査区近くで表採したものであるが、現在でも周辺の水田は遺物の散布が認められる。

- (2) 『四柳白山下遺跡Ⅰ・Ⅱ』1990.1991 羽咋市教育委員会
 (3) 『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報2・3』1991・1992 石川県埋蔵文化財保存協会
 (4) 『拓影 石川県立埋蔵文化財センター所報』第36号 1991 石川県立埋蔵文化財センター
 (5) 現在の行政区画においても「大町」は本遺跡と接する山麓の駅路沿いから大町C遺跡が立地する邑知地溝帯中央部までの広がりがあり、「大町」という墨書文字が地名を表すと解すれば、文献史料である承久三年(1221)の『能登国田数注文』に記載されるのを初見とする遺跡周辺の地名を一挙に平安時代までさかのぼらせる可能性が強い。

参考文献

- 『羽咋市史』原始・古代編 1973 石川県羽咋市
 『鹿島町史』通史・民俗編 1985 石川県鹿島郡鹿島町
 『古代日本の交通路Ⅳ』藤岡謙二郎編 1978 大明堂
 『四柳白山下遺跡Ⅰ・Ⅱ』1990.1991 羽咋市教育委員会



掘り上がったSB01・02・03(第1次調査)



掘り上がったSB04・05・SD04(第2次調査)

第3図 四柳白山下遺跡と周辺の遺跡分布図(1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表1

遺跡番号	名 称	所 在 地	所在地番	種 別	現 状	立 地	時 代	出土品	備 考	文 献
07007	通井国造跡	羽咋市通井町		敷布地	田	丘陵部	古墳	銅器3	通井工事中発見	
07109	通井古墳	羽咋市通井町		古墳	宅地	丘陵部	古墳	須恵器	円墳、横穴式石室	62
07110	通井中世墓群	羽咋市通井町		墓	荒地	丘陵部	中世	瓦葺、板葺		
07111	通井中世古墳群	羽咋市通井町		古墳	山林	丘陵	古墳		2基以上	
07112	四郎中らだ遺跡	羽咋市四郎町		敷布地	田	平地	古墳	土器、高杯、器台	1956年縄文時代前期	
07113	四郎中遺跡	羽咋市四郎町		民家	宅地・畑・	平地	縄文	土器、石杵1、石	3、磨製石斧、	765,768
07114	四郎中の堂遺跡	羽咋市四郎町		敷布地	畑	丘陵	縄文・古墳	縄文土器、石器、土師器		765,768
07115	四郎中史前墓	羽咋市四郎町	オハカ	墓	山林	丘陵斜面	中世	板葺、瓦葺塔、四	耳堂2	
07116	四郎中穴遺跡	羽咋市四郎町		穴遺跡	山林	丘陵斜面	古墳		7基よりなる。	
07117	四郎白山下遺跡	羽咋市四郎町	白山下	墓跡	田	平地	奈良・平安	土器(磨製土器も含む)、木器、円蓋	1990、91年市教委発掘調査	1493,1772
07118	四郎宮の横古墳遺跡	羽咋市四郎町	宮の横	敷布地	田	平地	中世	漆器、土器、家・増	築瓦葺	
07119	四郎ミツ遺跡	羽咋市四郎町	みつこ	敷布地	田	平地	奈良・古墳			
07120	大町穴遺跡	羽咋市大町上野	オハカノ上	穴遺跡	山林	丘陵斜面	古墳		2基以上よりなる。	
07121	大町ダイジンダウ遺跡	羽咋市大町	大津宮	敷布地	田	平地	中世			
07122	大町なつた遺跡	羽咋市大町	なつた	敷布地	田	平地	不詳	長瀬産1	1978年、跡地管理時発見(詳細地点不明)	
07123	小倉森ヘイナイメB遺跡	羽咋市大町・ 鹿島町小倉森		敷布地	田	平地	奈良・平安		鹿島町小倉森地内にまたがる。	
07124	大町ゴングウダリ遺跡	羽咋市大町	ゴングウダリ (五郎宮)	敷布地	田	平地	古墳			
07125	大町C遺跡	羽咋市大町		墓跡	田	平地	平安	「大町」遺跡土器	1991年縄文センター発掘調査	
34001	小倉森ヘイナイメA遺跡	鹿島町小倉森	川久保	敷布地	田	平地	縄文			
34002	小倉森ヘイナイメB遺跡	鹿島町小倉森・ 羽咋市大町	ヘイナイメ	敷布地	田	平地	奈良・平安			
34003	曾根大坪遺跡	鹿島町曾根	大坪	敷布地	田	平地	奈良	土器	1961年、跡地管理により発見。旧「曾根遺跡(A)」と改称。	
34004	曾根堂田遺跡	鹿島町曾根	堂田の渡	敷布地	田	平地	奈良	土器、高杯、土器	1959年、跡地管理により発見。旧「曾根南遺跡」を改称。	
34005	曾根C遺跡	鹿島町曾根		墓跡	田	平地	古墳	須恵器、土師器		
34006	小倉森伝説遺跡	鹿島町小倉森		敷布地	田	台地末端	鎌倉	銭	跡地管理により発見。	
34007	小倉森宮田遺跡	鹿島町小倉森	宮田	敷布地	田	平地	古墳	平盤、鏝	跡地管理により発見。旧「曾根遺跡(B)」と改称。	
34008	曾根1号墳	鹿島町曾根		古墳	宅地	台地端	古墳	瓦葺土壇、横穴大、 石室、板葺、須恵器、 石灯、台付土器、 銅器、土器、土	円墳、横穴式石室。 1908年、山下幸三氏 により発見。横穴部平	48,499,511 1177
	曾根2号墳	鹿島町曾根		古墳	宅地	台地端	古墳		円墳(直径約5m高約1.5m) 横穴式石室。	
	曾根3号墳	鹿島町曾根		古墳	宅地	台地端	古墳		円墳(直径約5m高約1.5m) 横穴式石室。土器、 高杯より小形化。	
34009	高倉ケキツ遺跡	鹿島町高倉	ケキツ	敷布地	田	谷間	縄文	磨製石斧		
34010	高倉経塚古墳	鹿島町高倉		古墳	宅地	扇形部	古墳	土器大刀2、銅器 刀、須恵器(14 高杯、土)	円墳(直径10m)、横穴 式石室。土器、高杯、 須恵器、土師器	48,499, 1177
34011	高倉経塚跡遺跡	鹿島町高倉		敷布地	宅地・畑	扇形部	古墳			
34012	高倉生遺跡	鹿島町高倉	キツケ小野	敷布地	宅地	扇形部	奈良	土器		
34013	高倉遺跡	鹿島町高倉		敷布地	田	扇形部	古墳	刀、小形丸座、 高杯	1960年、跡地管理により発見。	501,408
34014	高倉カタ・ スドモト遺跡	鹿島町高倉・曾根		墓跡	田	平地	古墳一中世	須恵器、土師器、 白磁、青磁、須恵 器、土器	横穴式石室、横穴式 石室。土師、1990年 市教委発掘調査	1769
34015	高倉キツジ遺跡	鹿島町高倉		墓跡	田	平地	縄文・奈良 中世	縄文土器、奈良土 器、須恵器	横穴式石室、土師、 1990年市教委発掘 調査	1769

第1表 周辺遺跡地名表2

遺跡番号	名 称	所 在 地	所在地通称	種 別	現 状	立 地	時 代	出 土 品	備 考	文 献
34016	高島ナラダ遺跡	熊取町藤井・高島		集落跡	田	平地	弥生~中世	須恵器、土師器、 高瀬焼	縄文柱建物、土坑、溝 1969年縄文土器存続会 発掘調査。	1602
34017	藤井ヤンジョゴリ遺跡	熊取町関田・藤井	ヤンジョゴリ	集落跡	田	平地	弥生	弥生土器、パン状 炭化物	平地式住居跡、竈・柱 建物、1969年縄文土器 存続会発掘調査。	1602
36011	正勝谷B古墳群	鹿西町金丸正勝谷		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳3基。	
36012	御郡谷神倉石垣遺跡	鹿西町金丸宮地	カナマリボ	散在地	山林・畑	丘陵地	中世	土師器		
36013	金丸宮地1号墳 (鳥居塚古墳)	鹿西町金丸宮地		古墳	庭園・竹藪	丘陵地	古墳		円墳(径6m、高1.6m)。 横穴式石室(両廂式)。 可指定史跡。	133
	金丸宮地2号墳	鹿西町金丸宮地		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、横穴式石室。	
	金丸宮地3号墳	鹿西町金丸宮地		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、横穴式石室。	
36014	金丸宮地遺跡	鹿西町金丸宮地		散在地	田	平地	古墳~奈良	須恵器(臼、長瀬 器)、土師器(高 杯、蓋)		339,444
36015	仏性山天平寺跡	鹿西町金丸沢		寺院跡	畑	谷地	鎌倉			313
36016	金丸城跡	鹿西町金丸沢		城跡	山林	丘陵	鎌倉			313
36017	沢B古墳群	鹿西町金丸沢		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳5基。	
36018	沢B古墳群	鹿西町金丸沢		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳3基、方墳1基。	
36019	尊厳寺跡	鹿西町金丸沢		寺院跡	畑	平地	鎌倉・室町			
36020	金丸地頭能跡	鹿西町金丸谷		城跡	宅地	平地	鎌倉			
36021	谷内古墳群	鹿西町金丸谷内		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳3基。	
36022	沢遺跡	鹿西町金丸沢		散在地	田	山麓	奈良・平安	土師器、須恵器		
36023	谷内フショウ遺跡	鹿西町金丸谷内	フショウジ	散在地	田	山麓	奈良・平安	土師器、須恵器		
36024	谷内フショウヤチ遺跡	鹿西町金丸谷内	フショウヤチ	集落跡	山林・宅地 上水道施設	山麓部	縄文~近世	土師器、木器、金銭器	1965~1979年、縄文文セ ンター発掘調査。	
36025	金丸谷遺跡	鹿西町金丸谷		散在地	宅地・田	山麓部	弥生~中世	土師器、須恵器、 土師器、木器、金銭器	1957年、緑油塗理中興 見、1980年、縄文文セ ンター発掘調査、弥生時 代の縄文遺構を含む。	448
36026	杉谷チヤノバタケ遺跡	鹿西町金丸杉谷	チヤノバタケ	集落跡	山林・ 上水道施設	丘陵	縄文~近世	土器、石器、チヤ ノバタケ、漆器、 須恵器、土師器	1987、1988年縄文セ ンター発掘調査、弥生時 代の縄文遺構を含む。	1622
36027	金丸杉谷河原跡	鹿西町金丸杉谷		散在地	畑	山麓部	弥生	土器、石器	杉谷川より採取。	
36028	杉谷A古墳群	鹿西町金丸杉谷		古墳	山林	丘陵	古墳	鉄器	前方後円墳1基(杉谷 イノ谷古墳、全長60m、 径3m)、円墳13基、方墳 3基、1966~1989年 縄文センター発掘調査。	石寺研会誌 第35号1992
36029	杉谷B古墳群	鹿西町金丸杉谷		古墳	山林	丘陵	古墳		前方後円墳1基、円墳 8基。	
36030	杉谷C古墳群	鹿西町金丸杉谷		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳2基。	
36031	杉谷ヒギシ遺跡	鹿西町金丸杉谷	ヒギシ	散在地	田	丘陵地	不詳			
36032	杉谷遺跡	鹿西町金丸杉谷	コトミ・ セナシノイ	散在地	山林	丘陵地	不詳			
36033	杉谷ヤサカ遺跡	鹿西町金丸杉谷	ヤサカ	散在地	畑・宅地	丘陵地	不詳			
36034	能登部堀1~2号墳	鹿西町能登部下		古墳	山林	丘陵	古墳			
36035	能登部下遺跡	鹿西町能登部下		散在地	畑・社地	山麓部	縄文~古墳	磨製石器、陶器土 器、土師器		
36037	能登部上宮町遺跡	鹿西町能登部下		散在地	畑・社地	丘陵地	縄文	磨製石器		
36038	天神1~10号墳	鹿西町能登部下		古墳	山林	丘陵	古墳			
36039	能登部城跡	鹿西町能登部下		城跡	山林	丘陵	鎌倉			
36040	熊崎山・丸山1~12 号墳	鹿西町能登部下		古墳	山林	丘陵	古墳			
36041	中大門庚申塚	鹿西町能登部下 中大門		塚	荒地	平地	不詳			
36042	能登部小学校遺跡	鹿西町能登部下		散在地	校地	平地	縄文~古墳	縄文土器、弥生土 器、土師器	1989、1990年町教委発 掘調査。	
36043	賢王山1~7号墳	鹿西町能登部下		古墳	山林	丘陵	古墳			1454
36046	上流遺跡	鹿西町能登部下 上流		散在地	畑	丘陵地	不詳			
36047	結丸遺跡	鹿西町結丸	熊崎山	散在地	畑	丘陵地	縄文~中世	縄文土器、土師器 須恵器、高瀬焼		

第2章 調査に至る経過と経緯

第1節 第3次調査に至る経緯

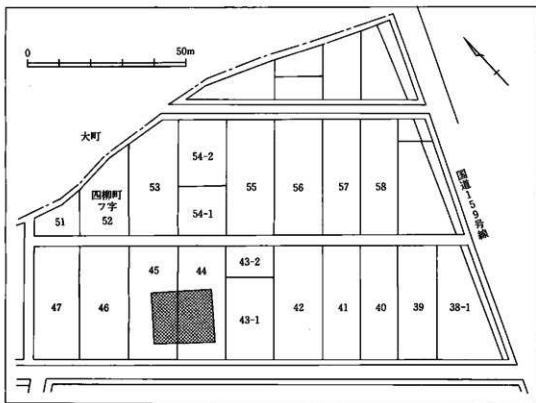
平成4年11月15日に、羽咋市四柳町つ字44・45番地の現況地目田に対して、個人住宅の建設を目的とした開発計画が羽咋市教育委員会（以下：市教委）に提出された。

これを受けた市教委では、この事業予定地が平成元年1月に確認された周知の遺跡（遺跡No.07117 四柳白山下遺跡）の範囲内であることから、平成4年11月17日に調査対象区域（総面積1,056 m²）内において、バックホーを用いて3箇所（試掘面積合計約35m²）のトレンチ（試掘坑）を設定する形で分布調査を実施した。その結果、すべてのトレンチ内において須恵器・土師器等の遺物が確認され、ただちに関連諸機関と発掘調査に関する協議を行った。

以上の経緯を経て、市教委が事業主体となり、文部省補助金を受けて本調査は実施された。調査期間は平成5年4月12日から5月25日までの24日間、調査面積は約310m²である。

近年、国道159号鹿島バイパス改築工事の進行によって、四柳白山下遺跡が存在する同バイパス予定地周辺での宅地等の開発が目立ち始めている。本調査の原因である開発もこうしたケースのひとつであり、通算でいえば第3次調査ということになる。

なお、調査区域・グリッド割等は第4図および第5図のとおりである。



第4図 第3次調査区位置図

第2節 調査の経過（日誌抄）

4月12日（月）小雨

本日より現地入り。調査区を設定し、バックホーによる表土除去作業を行う。

4月13日（火）晴一時雨

発掘用機材の搬入を行う。

4月14日（水）～21日（水）晴（内6日間）

調査区北東端において湧水が激しく排水用の溝を切り、茶褐色層を掘り下げていく。銭貨出土。

4月22日（木）雨のち曇り

遺構検出を行い、溝状遺構4条確認。

4月23日（金）曇り一時雨

茶褐色層の掘り下げと同時に、水準測量を行う。

4月26日（月）晴

調査区南側は攪乱が激しく、遺構確認できない。

4月27（火）・28日（水）曇り一時小雨

遺構検出作業と検出状況の写真撮影を行う。

4月30日（金）雨のち晴

溝状遺構の平面図作成。

5月6日（木）晴

溝状遺構を掘り下げ、写真撮影の後レベル記入。

5月7（金）・11日（火）曇り

灰茶褐色層及び淡青灰褐色細砂質層の掘り下げ。

5月12（水）・15日（土）晴のち曇り

灰茶褐色層を掘り下げ、E4区内において淡青灰褐色土をベース面とした遺構を検出。

5月17日（月）曇り

灰茶褐色層を掘り下げ、遺構を検出する。

5月18日（火）雨のち曇り

遺構を再確認し、平面図作成作業を行う。

5月19日（水）晴

検出遺構を掘り下げ、平面図の作成、レベル記入を行う。現地説明会を開催する（33名参加）。

5月20日（木）晴

遺構の半掘、平面図への追加、レベル記入などの作業を同時に進行する。柱穴内の柱根を確認。

5月21日（金）晴

遺構の完掘作業、平面図の作成、調査区の平板測量、調査区北・東側壁面の断面図取り等を行う。

5月24（月）・25日（水）晴

発掘用機材等の撤収を行い、バックホーによる調査区の埋戻し作業の完了をもって現地調査終了。



4/14 調査前の供養



5/17 遺構検出作業



5/19 現地説明会



5/25 埋戻し風景

第2節 土層の概要

四柳白山下遺跡は邑知地溝帯の中央部南端、礫石ヶ峰山地を開析して流れ出る地獄谷川などの小河川によって形成された小規模な扇状地の扇端部に立地している。そのため基盤は黄褐色系の砂質層であり、伏流水の湧き水が激しい所となっている。

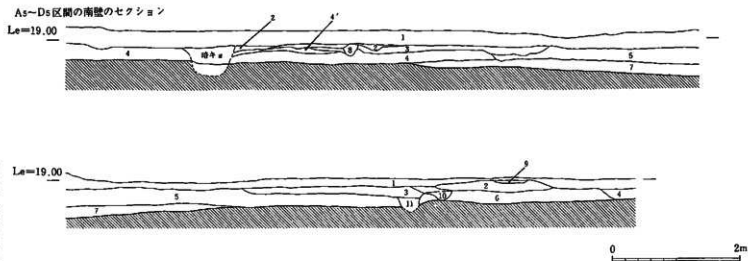
第3次調査区の現況は標高19m前後を測る水田であるが、昭和20年代に行われた耕地整理前の様子を「余喜村土地改良区第二工区現形図」に描かれた等高線によって見てみると、山地との境から東から西方向へと始まる比較的傾斜の急な水田地帯の一角に当たることが判読できる。また、第1・2次調査区とは直線距離で300m弱、その間に小規模な谷状の低地を挟んで位置していることになる。

これまでの調査では、黄褐色系の基盤砂層までを掘り下げて遺構を検出してきたが、今回の調査では現地表面からそこに至る間が古代以降の土地利用によって大きく改変を受けており、奈良・平安時代の整地層である黒灰色系の砂質粘土層は調査区の南東端部分においてのみ認められた。よって、調査区の大半は幾度かの水田化の進行にともなって削られたり、盛土された土層であるが、土層中には二次的な移動による遺物を含んでいる。

調査区東端における基盤砂層までの平均的な層位を第6図の土層断面図でみると、現耕作土である茶褐色土（第1層）、淡青褐色細砂質土（第5層）、そしてその下に奈良・平安時代の整地層である黒灰色砂質粘土層（第7層）が堆積している。残存していた第7層は厚さ20cm、標高18.6m前後であり、全体的な堆積状況は確認できなかった。しかし、調査区の南東側農水路での断面露呈部には第7層と思われる堆積層が邑知地溝帯の南東山麓側から旧邑知潟側沖積地へ、東から西方向に向かって緩やかな傾斜面をなして層向している状況が観察できることから、調査区周辺においても同様の傾向であったと想定できよう。

遺構の大半はこの整地層から掘り込んでいるため、第1層をバックホーによって除去し、整地層上面である第5層以下を人力で掘り下げて遺構検出を行った。

しかし、先にも述べたように後世の開田のための攪乱層などが相まって、整地層での遺構検出は極めて判断がむずかしく、大部分は基盤砂層までを掘り下げて確認した。



第3表 土層分類表

第1層	茶褐色土(現耕作土)	第6層	濁灰褐色粘砂質土
第2層	黄褐色砂質土	第7層	淡黒灰褐色細砂質土
第3層	灰茶褐色砂質土	第8層	青灰色粘質土
第4層	黄灰色砂質土(礫含む)	第9層	黒褐色粘質土
第4'層	明黄灰色砂質土	第10層	淡黒灰褐色砂質土(覆土)
第5層	濁青灰褐色粘砂質土	第11層	第10層と同じ

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要

前章でも述べたように、第3次調査区の大半は開田の際の削平、盛土による堆積層であり、調査区南東端において奈良時代および中世以降の遺構を検出した。発見したおもな遺構には、畝状溝8条・柱穴・土坑・性格不明の遺構などがある。

これらの遺構のほとんどは、奈良時代の整地層である黒灰色砂質粘土層を掘り込んでいるが、中世以降とした畝状溝4条は、現耕作土直下にあたる黒褐色粘質土面での検出であった。

全体的には奈良時代を通して営まれた集落の一部を構成していたものと想定されるが、畝状溝SU01～04とその他の遺構は切り合っており、畝状溝のほうが新しい。

第2節 各 説

(1) 柱穴および小穴 [P1～10]

調査区南東端(C～E-3・4グリッド区間)に位置する小穴状遺構のなかに、柱根が残存する柱穴P2・3・4を確認している。限定された小規模な面積のため、掘立柱建物の一部に該当するの否かは判断できないので、柱筋の通る南北3間(P1～9間)の柱列と東西2間(P9～10間)の柱列を抽出するにとどめておきたい。

南北柱間の寸法は北より150cm、155cm、180cm、方位はN-21°-Wを測る。東西柱間は西より180cm、200cmを測る。柱断面は一辺40～50cmの隅丸方形ないし不整形なものであり、P2・P3に残っていた柱直径はそれぞれ13.5cm、18cmを測る。

(2) 用途不明の遺構 [SX01]

D3区北東端で認められた一辺120cm前後の不整形な掘り込み。検出面からの深さは10cmと浅いが、淡灰褐色細砂質土を基本として、灰褐色系粘土や熱を受け変色した粘土面および炭化物・木炭を多く含んでおり、さらに加熱された円礫(第16図 186)や籾の羽口片、小魼滓などの遺物が出土していることから、鋳造・小鍛冶などに関連した遺構としてとらえておきたい。

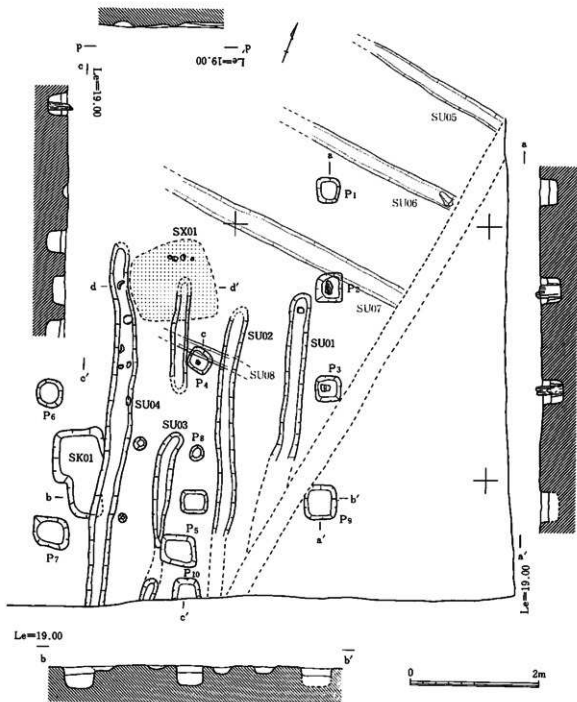
(3) 畝状溝

SU01～04

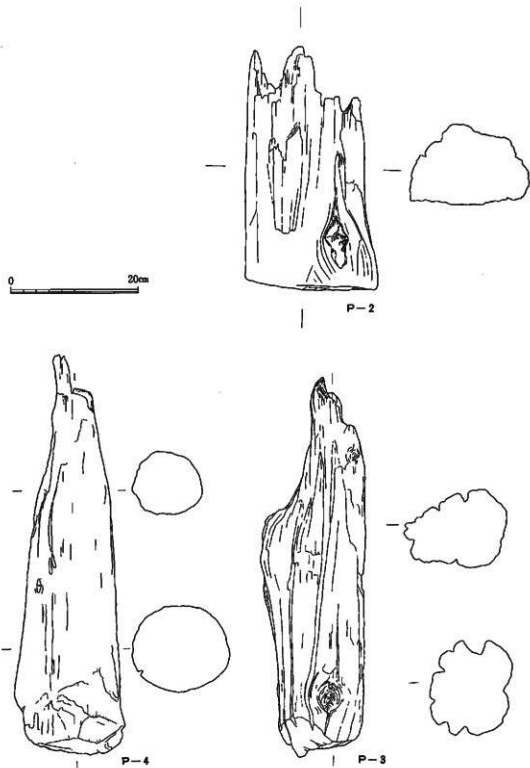
調査区南東端で検出した南北方向に走る畝状の溝で、いずれも奈良時代の包含層(第7層)の上面に掘り込まれており、今回の調査で確認できた古代の最も新しい遺構といえる。溝幅は20～40cm、深さは10cm、畝幅(溝間距離)が0.5～0.8m、方位はN-19°-W前後でままとっている。検出した長さはSU04の5.7mが最長であり、南側は調査区外のために未検出。

SU05～08

古代の畝状溝と同様調査区南東端に位置しているが、表土直下での検出であり中世以降の遺構とした。深さは20～35cm前後が平均的で、畝幅(溝間距離)が1.3～1.8m前後、方位はN-86°-W前後であり、前述SU01～04と異なりほぼ東西方位を示している。



第7図 調査区遺構平面図(1/60)



第8圖 柱模実測圖(1/4)

第5章 出土遺物

今回の調査で検出した遺物には、須恵器・土師器・石製品・製塩・生産関係の遺物などがある。これらの大半が奈良時代のものであるため、ここでは畝状の溝（SU）および包含層出土遺物の説明を中心に記述を進め、総合的な評価は第6章のまとめで行うことにしたい。また、説明の都合上、同じ器種での分類は『四柳白山下遺跡Ⅰ』で抽出した分類に準じている。

第1節 古代の遺物

(1) 須恵器

坏蓋（第9図）

総点数で34点以上が出土しており、次に述べる有台坏と1器種としての点数が揃っている。

第5表に示したように、口径11～12cm台と14cmおよび15cm台にまとまった分布状況が認められるが、17cm台にも一定量の存在が予想される。このなかで器形の知られる資料の相関を示しているのが第4表である。この表からは先の口径分布での11～12cm台のものが内面返りをもち、擬宝珠形のつまみがつく坏蓋A類、口径14cm台にはボタン形のつまみも体部も偏平な坏蓋C類、口径15cm台に天井部からならだかに口縁端部に移行する笠形の坏蓋B類の存在が確認できる。

また、出土資料の天井部はすべて回転ヘラ削りが施されており、口縁端部の形態は断面が三角形を呈するタイプ、端部を外方につまみ出すタイプが主流で、内面返り、巻込、折曲、丸といった形態も一定量認められる。断面三角形のものには既往の調査で特徴的であったB1類の出土量は少ない。

有台坏（第9・10図）

総点数で35点以上が出土しており、須恵器のなかにも占める比率は34%と食膳具のなかでは最も多い。第6～10表に示したように、口径11～14cmの間に有台坏A・B・C・D・E・H類といった形態的特徴をもった資料が確認できるが、圧倒的な量比をもつものはない。

また、全形を知ることはできなかったが、底部片の資料から口径14～15cm台で高径指数25、底径指数75前後と偏平な器形の量比がさらに増えることが予想される。

無台坏（第11図）

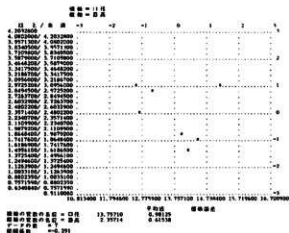
個体数28点以上と食膳具では有台坏に次ぐ量を占めている。そのなかでも口径11～12cm台に量的なピークがあり、形態的には高径指数30前後で底部から体部が丸みをもって立ち上がる無台坏C類とD類の一部が主体となっている。また、高径指数25と口径と底径との差が他の器形と比して小さく、偏平なE類も一定量認められる。

高坏（第13図125）

坏部から脚部までを復元できるものは出土していない。125は脚基部から反りながら水平方向に開いた脚端部に、やや下方につまみ出した端面をつくる無蓋高坏になると思われる。

壺・瓶類（第11図105・106・第12図107～109・第13図123～128）

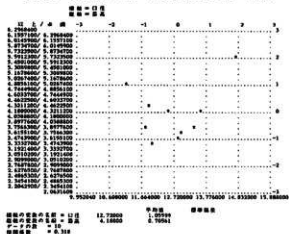
第4表 須惠器坏蓋・相關散布図(口径・器高)



第5表 須惠器坏蓋・口径分布表

[illegible]

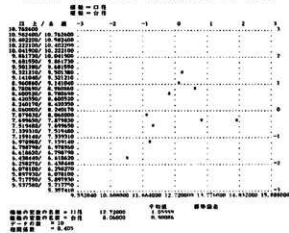
第6表 須惠器有台坏・相關散布図(口径・器高)



第7表 須惠器有台坪・口径分布表

東京の標準 = 100		神戸の標準 = 100	
東京の基準 = 100		神戸の基準 = 100	
以上 / 以下	1800	10	30
9.232000	9.688200	-5.00	0
9.688200	10.167200	-4.00	0
10.167200	10.562200	-2.40	0
10.562200	10.875000	-2.00	0
11.136200	11.136200	-0.00	0
11.136200	11.475000	-0.80	0
11.723800	11.723800	-1.20	0
11.723800	12.075000	-0.60	0
12.075000	12.437200	-0.60	0
12.437200	12.725000	-0.60	0
12.725000	13.036000	0.00	0
13.036000	13.367200	0.60	0
13.367200	13.675000	0.60	0
13.675000	14.000000	1.20	0
14.000000	14.343800	1.80	0
14.343800	14.707200	1.80	0
14.707200	15.075000	2.40	0
15.075000	15.450000	2.40	0
15.450000	15.830000	3.00	0
15.830000	16.215000	3.00	0

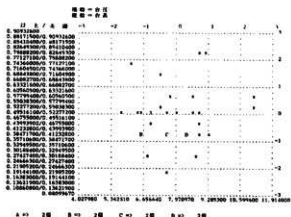
第8表 須惠器有台坏・相關散布図(口径・台径)



第9表 須惠器有台坏・体部外傾度分布表

[illegible]

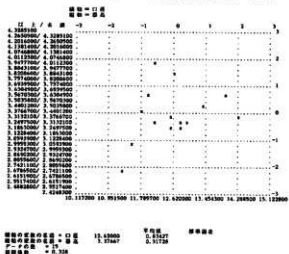
第10表 須惠器有台坪・相關散布圖(台坪・台高)



第11表 須磨園無台坏・口径分布表

[illegible]

第12表 須惠器舞台坪・相關散布図(口径・器高)

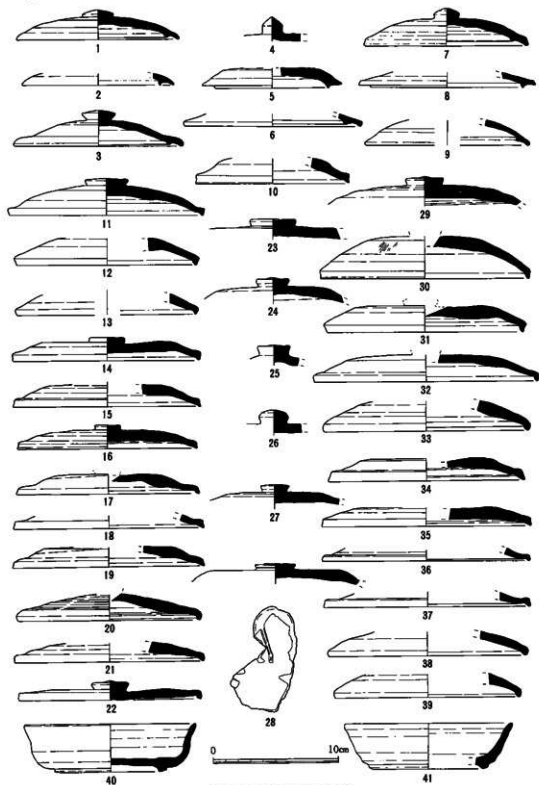


第13表 須惠器無台坏・体部外傾度分布表

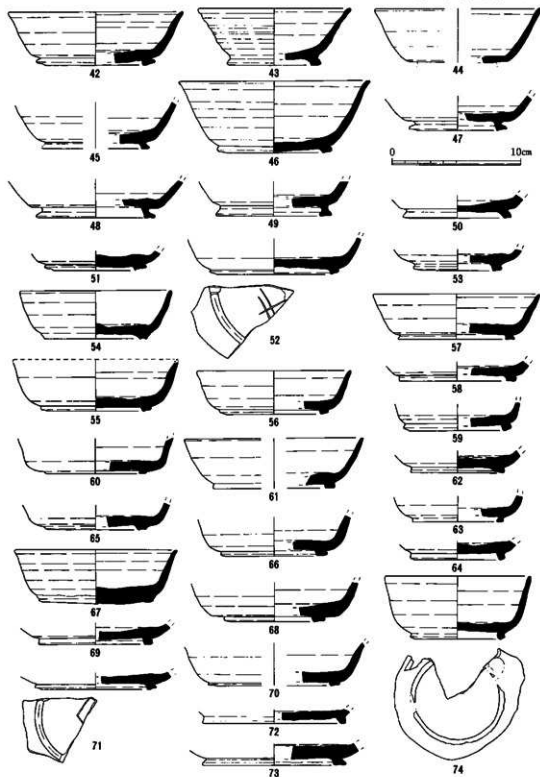
定額消費 1000 円				
消費額の順位 1000 円				
品名	消費額	消費率	順位	消費率
1. 米	1000.00	100.00%	1	100.00%
2. 小麦	800.00	80.00%	2	80.00%
3. 大豆	600.00	60.00%	3	60.00%
4. とうもろこし	400.00	40.00%	4	40.00%
5. とうもろこし	300.00	30.00%	5	30.00%
6. とうもろこし	200.00	20.00%	6	20.00%
7. とうもろこし	100.00	10.00%	7	10.00%
8. とうもろこし	50.00	5.00%	8	5.00%
9. とうもろこし	20.00	2.00%	9	2.00%
10. とうもろこし	10.00	1.00%	10	1.00%
11. とうもろこし	5.00	0.50%	11	0.50%
12. とうもろこし	2.00	0.20%	12	0.20%
13. とうもろこし	1.00	0.10%	13	0.10%
14. とうもろこし	0.50	0.05%	14	0.05%
15. とうもろこし	0.20	0.02%	15	0.02%
16. とうもろこし	0.10	0.01%	16	0.01%
17. とうもろこし	0.05	0.005%	17	0.005%
18. とうもろこし	0.02	0.002%	18	0.002%
19. とうもろこし	0.01	0.001%	19	0.001%
20. とうもろこし	0.00	0.000%	20	0.000%

第14表 土師器壘・口径分布表

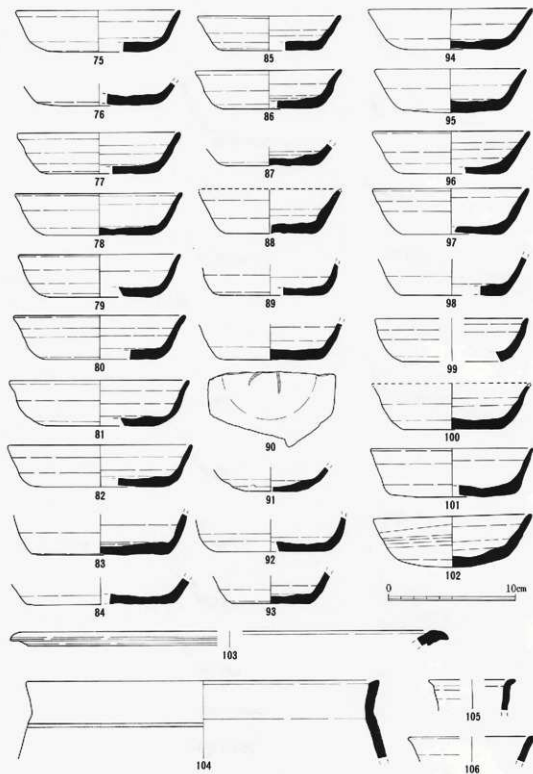
支店の番号		戸-の番号 × 15	
支店番号		口座	
日 次	支 店	10 月	10 月 前
	4-330140		
4-335345	8,297,140	-3,000	0
2077145	7,498,740	-2,000	0
7-638945	8,820,740	-2,000	0
3-0387145	13,160,140	-1,000	0
10-382925	11,744,900	-1,800	0
7-473750	13,160,140	-1,000	0
12-1861740	14,867,900	-1,200	1
7-125850	14,867,900	-1,000	1
9-8237940	17,159,180	-600	0
7-125850	14,867,900	-1,000	0
4-913924	19,915,000	0.00	0
7-125850	14,867,900	-1,000	0
21-276340	21,876,300	300-00000	0
22-8770740	24,080,000	0.00	0
24-009050	25,342,700	0.00	2
75-962705	26,724,000	1.00	0
76-702105	28,687,000	0.00	0
78-099050	29,447,700	2.10	0
79-447705	30,809,000	0.00	0
80-899050	32,171,700	2.70	0
12-271700		1.00	0



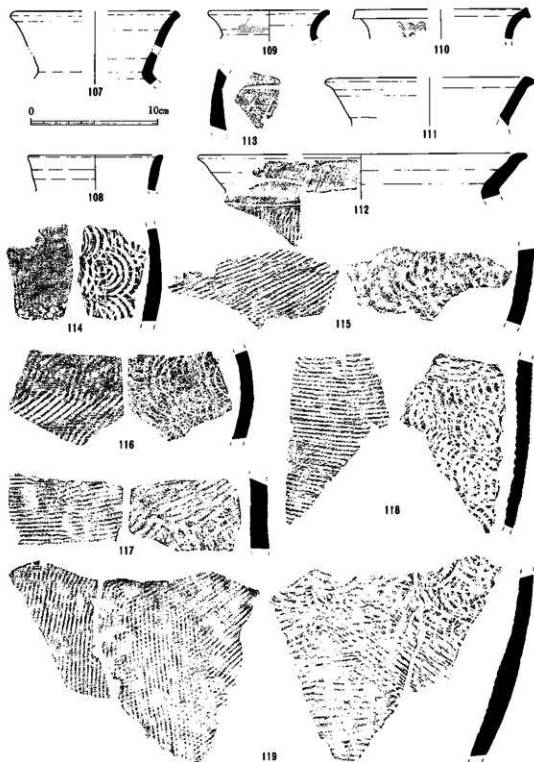
第9圖 須惠器実測図1 (1/3)



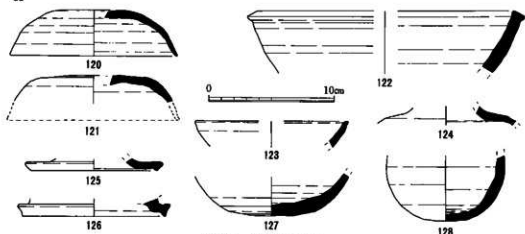
第10図 須恵器実測図2 (1/3)



第11圖 須惠器実測圖3 (1/3)



第12図 須恵器実測図4 (1/3)



第13図 須恵器実測図5

いずれも局部的な破片が多い。108は口径10.6cmを測る横瓶の口縁破片になると思われるが、他の壺類の口縁破片も含めて体部へと続く資料はない。126 はいわゆる長頸壺に付される高台片で、高台径11.2cmを測ることから、口径13cm、体部最大径17cm前後で肩部及び口頸部に数条の沈線をめぐらす器形が予想される。127・128は高台の付かない体部下半の資料で、いずれも外面にはへう削りが施される。

甕 (第11図103・104・第12図110～113)

調査区出土の甕で図化できたものは口縁破片がほとんどで、口径26～28cm台の資料に口縁部が外傾しながら面をとるもの(112)と口縁部が直立気味に立ち上がるもの(104)を確認している。調整はすべて口縁部内外面にナデ、体部外面に平行叩き、内面にも叩き調整による同心円文を施す。また、酸化硬質焼成によって暗赤褐色を呈し、叩き目が口縁部外面にまで及んでいる437と酸化軟質焼成によって淡灰褐色の104はカキ目で叩き目を消去している。

その他 (第12図114～119・第13図120～122)

120は降灰の天井部外面にへう削りが施され、端部がそのまま収まる浅い碗形の器形であり、類品が少ないことから今回は蓋として扱った。122は鉢、114～119は甕および横瓶の体部片。

(2) 土師器

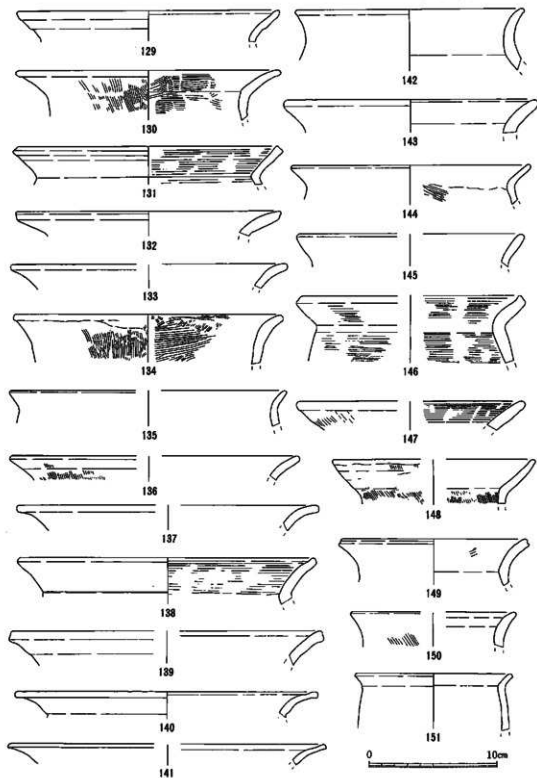
甕 (第14・15図)

第14表に示すように、口径13～14cmの間に分布する小形甕と口径20cmと25cm台にピークをもつ中形甕、少量ではあるが30cm以上の大型甕の一群を確認した。

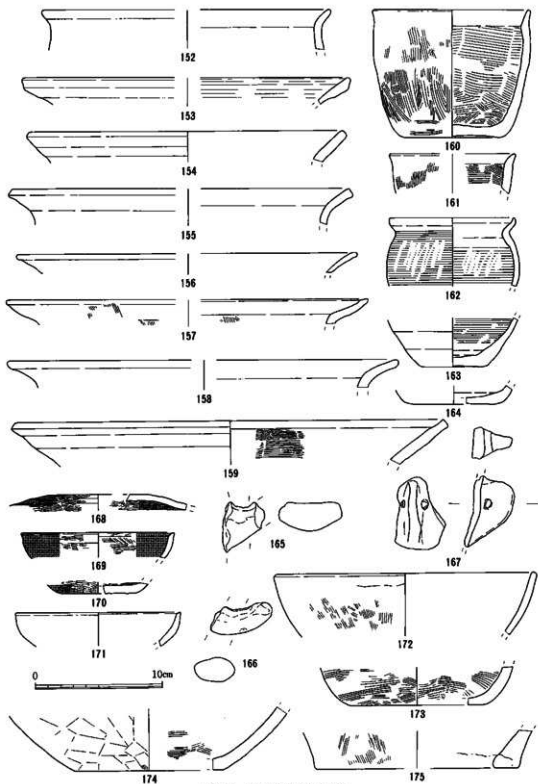
小形甕 口縁部がくの字状に外反し、そのまま端部が丸く収まるものがほとんどであるが、口縁部が短く外反さず端部をつまみ上げるカキ目調整された資料(162)が認められる。

中形甕 小形甕同様くの字口縁で端部に面をもたないものが主体となっているが、くの字口縁から端部が面をもつか、さらに上方につまみ出されるものも少数認められる。

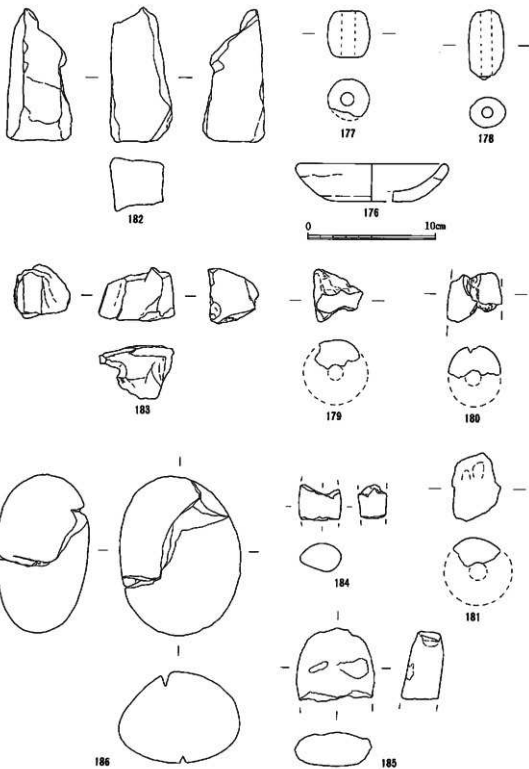
大形甕 口縁端部を面取りするもの(159)1点がある。また、底部形態では平底、回転糸切りの平底を確認している。



第14図 土師器実測図1(1/3)



第15圖 土師器実測図2 (1/3)



第16図 土製品・石製品実測図(1/3)

その他 (第15図)

甕の底部や把手片、資料が少ないので断定できないが、外面赤彩内黒土師器・内黒土師器・両面赤彩土師器・土師器の坏蓋・杓がある。

(3) 製塩関係の土器 (図版18)

平底の製塩土器になると思われる口縁部小片が1点出土している。本遺跡出土の製塩関係資料としては、これまでの棒状脚、支脚に続く確認例である。外面は通常認められる粘土紐痕を残しているが、内面はナデ調整により接合痕を消している。色調は淡黄褐色を呈する。

(4) 土製品 (第16図177・178)

第2次調査までは検出例のなかった土鍾が2点出土している。177は縁に丸みをもった円柱形でずんぐりとしており、178は長さが最大径の2倍近い紡錘形を呈する。計量的にはそれぞれ全長3.7cm、5.5cm・最大径3.3cm、2.7cm・孔径1.0cm、0.8cm・重量35g、30gを測る。

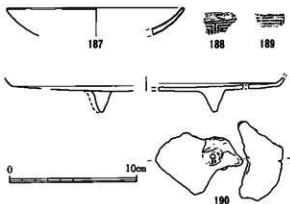
(5) 石製品 (第16図182～186)

石製品では砥石(182)が1点、磨製石斧(185)1点、用途不明3点の計5点を図化掲載している。このなかで186は使用痕や敲打痕もなく、平面・断面ともに楕円形を呈する丸みを帯びた円礫であるが、SX01の中心部から木炭とともに被熱した状態で出土していることから掲載したものである。出土状態は木炭を最も多く含んだSX01の下層上面で、黒く焼けた裏面を中心にして3片に割れた状態で検出された。計量的には長軸12.4cm・短軸9.6cm・重量1.19kgを測り、石材は安山岩と考えられる。

(6) 金属の生産と加工に関する遺物 (第16図176・179～181)

粗い粘土で作られた「とりべ」の可能性のある薄手の碗形土器1点(176)と轆の羽口3点(179～181)、前述砥石、また少量ではあるが銅滓の可能性のある小鉢⁽⁹⁾など、いずれもSX01および周辺の遺物包含層から出土している。

第2節 中世から近世の遺物 (第17図187～191)



第17図 中世から近世の遺物実測図

表土および盛土層から出土した中世から近世にかけての遺物は、いずれも小片や細片が多く、輸入陶磁器である白磁片(187)、口縁部上端に水平な面をなし、外面に雷文が押印された火舎・火鉢類になると思われる瓦質土器(188・189)、底外面に三足が付く鉄鍋の底部片⁽⁹⁾(190)、銭貨として「寛永通寶」(191)を図示するにとどめたが、その他に中世土師器、青磁、珠洲焼、肥前系陶磁器の細片が認められる。

第6章 調査の成果と課題

本遺跡の調査は隣接する第1次と第2次の調査区を継続して行っており、さらに今回の調査が第3次ということになる。よってここでは第3次分の遺物や遺構を整理した後で、一括の形でその年代と特色を検討し、遺跡の性格を明らかにするための手がかりとしたい。

第1節 遺構と遺物の検討

土器 第3次調査で出土した土器は、須恵器の無台杯・有台杯及び蓋・高杯・横瓶・短頸・直口壺及び長頸壺・甕、土師器の杯・碗・甕などが確認されており、これまでの出土器種と比べれば簡素といえる。第15表はこれらの器種構成を示したもので、点数の計算方法は口縁部計測法を用い、有台杯など蓋とセットになるものは、蓋と身の多い方の数値を採用した。

まず、全体の器種構成比率では食膳具が70.2%と高く、貯蔵具・煮炊具は9.0%、20.8%と低い比率となっている。用途別では食膳具、すなわち食器の比率が須恵器93.3%、土師器6.7%と須恵器が大勢を占める。むろん年代差等を見捨てて扱っているため、細かく見れば時期別に若干の変化はあるだろうが、奈良時代の前半を通して須恵器の優勢は変わらない。続いて貯蔵具では須恵器が、煮炊具ではすべて土師器が使用されている。

次に、須恵器だけに限定した器種構成をみると、用途別では食膳具が全体の87.9%と多数を占める。器種別では有台杯(杯蓋)が45.3%と最も多く、蓋と杯の合計値では全出土量の半数近くとなる。ついで無台杯が42.6%、その他は1割を切っている。土師器の場合では、食膳具が19%、煮炊具が81%となり、須恵器とは逆の構成比を示している。

以上、第3次調査区における出土土器の器種構成は、本遺跡における共通の様相を示してい

第15表 四柳白山下遺跡出土土器・器種構成表

四柳白山下遺跡 器種構成比	第1次分		第2次分		第3次分		総計	
	個体数(%)	破片数	個体数(%)	破片数	個体数(%)	破片数	個体数(%)	破片数
須恵器 杯A	5.63(16.3)	58(17.3)	18.18(40.3)	252(36.4)	5.26(45.1)	81(42.0)	29.07(32.0)	391(33.2)
杯B	23.80(69.0)	191(56.8)	23.85(52.9)	382(55.2)	5.60(48.0)	99(51.3)	52.96(58.2)	628(53.3)
高杯	*	*	0.38(0.9)	7(1.0)	*	*	0.38(0.4)	7(0.7)
鉄鉢	0.17(0.5)	1(0.3)	*	*	*	*	0.17(0.2)	1(*)
土師器杯または碗	4.28(12.4)	72(21.4)	2.66(5.9)	51(7.4)	0.81(6.9)	13(6.7)	7.75(8.5)	136(11.6)
高杯	0.61(1.8)	14(4.2)	*	*	*	*	0.61(0.7)	14(1.2)
食膳具 総計	34.49(58.2)	336(46.7)	45.07(68.2)	692(56.7)	11.67(70.2)	193(68.7)	90.94(58.3)	1,177(54.1)
須恵器 横瓶	*	*	1.29(27.3)	54(27.7)	0.52(34.7)	3(15.8)	1.81(22.8)	57(22.3)
甕	0.38(22.2)	21(50.0)	1.99(42.1)	65(33.3)	0.60(40.0)	12(63.2)	2.97(37.4)	98(38.3)
香	1.33(77.8)	21(50.0)	0.95(20.0)	49(25.1)	0.38(25.3)	4(21.0)	2.66(33.5)	74(28.9)
土師器 甕	*	*	0.50(10.6)	27(13.9)	*	*	0.50(6.3)	27(10.5)
貯蔵具 総計	1.71(3.4)	42(5.8)	4.73(7.2)	195(16.0)	1.50(9.0)	19(6.8)	7.94(6.0)	256(11.8)
土師器 甕	14.38(-)	341(100)	15.58(95.4)	263(79.0)	3.46(-)	69(100)	33.42(97.8)	673(90.6)
煮炊具	*	*	0.29(1.8)	32(9.6)	*	*	0.29(0.8)	32(4.3)
甕	*	*	0.45(2.8)	38(11.4)	*	*	0.45(1.4)	38(5.1)
煮炊具 総計	14.38(28.4)	341(47.4)	16.32(24.6)	333(27.3)	3.46(20.8)	69(24.6)	34.16(25.7)	743(34.1)
計器具 総計	50.58 個体	719 片	66.12 個体	1,220 片	16.63 個体	281 片	133.04 個体	2,176 片

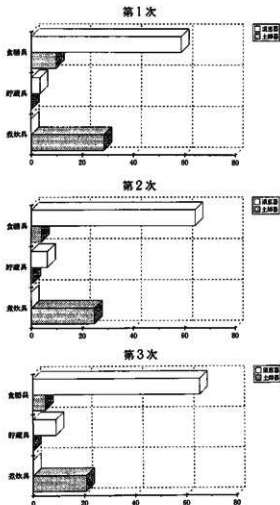
*は存在するが比率として表われないもの

るといえる。また、出土土器の年代については、第1次の報告で記述しているように、既存の編年に対比すれば、田嶋編年（田嶋1988）でのⅡ₁～Ⅳ₁期の範囲に比定されよう。

遺構 今回の調査における最も大きな成果のひとつは、前述出土土器の整理から奈良時代前半を主体とする本遺跡の範囲が確実に北東方向にも延びることを知り得た点にある。遺構検出時の様相も、まず南北方位の畝状溝があり、次にやはり南北の柱筋の通る柱穴をはじめとする奈良時代の生活面が存在する点はこれまでの遺構検出状況と共通するものであった。

また、検出遺構の構造や形態については、発掘範囲の制約および包含層の残存状況から判然としないが、現時点で切り合い関係の確認できない柱根の残る柱穴群と熱を受けた粘土や木炭が詰まった掘り込み（SX01）を同時期の遺構とすれば、その性格として掘立柱建物あるいは作業空間を仕切ったりした板塀のある敷地を想定し、さらにそうした屋内外に配置された付属施設（SX01）をもつ鋳造あるいは小鍛冶に関連した地区の可能性も考えられよう。

第16表 四柳白山下遺跡出土土器・用途別構成



第2節 まとめ

邑知地溝帯の南東山麓沿い、約400mの範囲内で行われた本遺跡の第1～3次にわたる調査によって奈良時代、与木郷域内の集落が確認された。

そして、検出された遺物や遺構の様相はそれぞれに共通点と相違点をもっている。まず、各地区出土土器が同じ時代幅に収まることを前提に、共通性を再び土器構成比の面から見てみると次の5点になる。

(1) 計測品総計に対する須恵器と土師器の比率は7対3前後となっている。

(2) 食膳具においては須恵器が9割前後を占め、有台坏・無台坏が主体となっている。

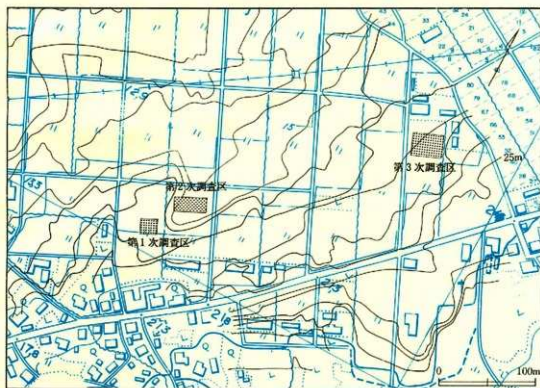
(3) 両面赤彩・外面赤彩内黒・内黒・土師器の食膳具が少量存在する。

(4) 貯蔵具は全体の1割未満であり、赤彩短頸壺(第2次)を除き、全て須恵器で構成される。

(5) 煮炊具は全て土師器であり、全体の2～3割を占める。

続いて、各調査区構成比を比較対照することによって、それぞれの相違点や特徴的な点を列記すると次の4点になる。

- (6) 食膳具における両面赤彩・外面赤彩内黒を主とする土師器の割合が第1次分で高い。
- (7) 食膳具において須恵器の占める割合が、計測品全体の構成比率で見ると58.5%（第1次）→64.1%（第2次）→65.3%（第3次）と高くなる。
- (8) 煮炊具において土師器の占める比率が、28.4%（第1次）→24.7%（第2次）→20.8%（第3次）と低くなる。
- (9) 出土遺物からみた第2次と第3次の様相は異なるが、土器の計量的比率は類似している。さらに、各調査区の性格・特徴を調査成果から整理すると次の4点になる。
- (10) 第1次調査区域内に配置された建物は、その規模・構造及び周辺から集中的に出土している墨書土器・円面硯・転用硯・鉄鉢などの遺物から、公的な（管理的）施設と考えられる。
- (11) 第2次調査区域内では、溝あるいは柱列（掘立柱廬）で細分した小区内に倉庫ふうの建物などが配置されている。溝内出土遺物から工房に関連した雑舎的な地区であったことが予想される。
- (12) 第1次と第2次の空間では、敷地・建物の規模・性格のうえで著しい差が認められるが、建物・柱列（掘立柱廬）・配石・溝などの配置は、主軸方位の同一性に基づいて配置され、建て替えられており、建物間の同時性と計画性が表現されていると思われる。
- (13) 第3次調査区内では、公的な性格を反映する遺物はなく、柱列（掘立柱廬）あるいは建物内外に配置された鋳造・小鍛冶など火を扱う工房的な施設の存在がうかがわれる。



第18図 第1～3次調査区位置図

「余喜村土地改良区第二工区現形図」をもとに今井作図

合計で一千㎡にも満たない調査面積の成果が、そのまま本遺跡全体の評価につながるか否かは断定できないが、こうした調査成果をもとに公的な色彩の強い場という観点から並べると、第1次から第2次・第3次（南西から北東方向）という順になる。さらに、最近の調査例では第3次調査区の北東400m、奈良時代後半を主とする小金森ヘイナイメ遺跡では方形の溝に囲まれた区画内から、炉跡（石敷遺構）や関連ピットが検出されており、本遺跡との関連、T房（小鍛冶）施設の地形的な条件・範囲・特性を提示するものとして注目される。

また、ここであげた各調査区ごとの共通点(1)～(5)と相違点(6)～(9)が、細かな場の性格にもとづく差異(10)～(13)と直接対応するのかは、資料の増加・蓄積によって補訂されなければならないであろう。当然のことながら、出土遺物の構成比を主とした計量的資料は本遺跡の範囲設定、遺跡内の様相を明確にするためのものであり、国道159号鹿島バイパス改築事業によって今後急増するであろう小規模な発掘調査を通じて本遺跡の性格を明かにする際のひとつの指標として設定可能か否かも今後の作業で行っていきたい。

以上、いくつかの観点から本遺跡の検討を行ってみたが、限られた時間と紙面の都合により消化不良の点は否めない。今後の課題も含めて各方面からの批判をうけることを希求している。

註

- (1) 小嶋芳孝氏の御教示による。
- (2) 垣内光次郎氏の御教示による。
- (3) 出土土器の構成比を主とした計量的手法に関しては、以下の文献で宇野隆夫氏が表示されている考え方を基本とした。「越中の国府・荘家・村落」『歴史学と考古学』高井第三郎先生喜寿記念論集 1988
- (4) 川畑 誠氏の御教示による。

第17表 四柳白山下遺跡出土土器類聚表1

図 表 順 号	器 種	器 形	出 土 地 点	土 器 名	出 土 年 代	出 土 数	出 土 量 (g)	計 算 値									遺構内土点	備 考
								A	B	C	D	E	F	G	H	I		
1	縄文	土 器	内外面ナデ、天井部 ヘリ部	SM4.L.5	Ⅱ	5.4	2.5	2.3	10.2	12.7	1.0	0.8	0.6	2.4			C4E	
2	+	+	内外面ナデ	S2.M2	Ⅱ	6.8				11.8							E4	
3	+	+	内外面ナデ 天井部ヘリ部	SM2.L.3	Ⅱ	3.6	2.0	1.9	10.3	13.1	0.8	1.3	0.75	2.5			D4	
4	+	+	内外面ナデ	SM3	Ⅱ		1.6	2.0						1.4			焼物同	外周部
5	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM4.L.3	Ⅱ	0.2				9.8	11.1	0.8					D1	
6	+	+	内外面ナデ	SM3	Ⅱ	1.8				14.0							D3	
7	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3.L.2	Ⅱ	1.4	2.0	1.85	11.2	12.6	0.9	1.3	0.8	3.0			D3.4	
8	+	+	ナデ	SM2	Ⅱ	2.0				13.8							D4	
9	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM2	Ⅱ	1.4						1.0					E4	
10	+	+	ナデ、天井部部	SM2.L.3	Ⅱ	2.4				9.9	12.1	1.5					D2	
11	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM4	Ⅱ	10.0	3.4	3.0	8.8	15.2	2.0	0.4	0.6	3.0			S/U位埋没	
12	+	+	ナデ	SM4	Ⅱ	4.2				14.0							D3, S/U位	
13	+	+	内外面ナデ、天井部部	S3	Ⅱ	1.0					1.0						D4	
14	+	+	ナデ、天井部部	SM4.L.3	Ⅱ	4.0	2.8	2.7	12.0	14.5	1.1	0.2	0.35	1.85			D3	
15	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3.L.2	Ⅱ	3.6				8.9	14.6	1.7					D4	
16	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM2	Ⅱ	10.0	2.0	2.2	8.6	14.0	1.3	0.2	0.4	1.9			D3	
17	+	+	ナデ、天井部部	SM3	Ⅱ	2.0				10.0	14.2	1.2					D4	
18	+	+	ナデ	SM2.L.2	Ⅱ	3.0				14.9							D3	
19	+	+	ナデ、天井部部	SM5	Ⅱ	5.2				10.0	15.0	1.5					D3	
20	+	+	ナデ、天井部部	SM2.L.2	Ⅱ	8.0				12.4	14.1	1.35					D3, S/X位	
21	+	+	ナデ	SM2	Ⅱ	1.2				14.7							D4	
22	+	+	ナデ、天井部部	SM2.L.2	Ⅱ	2.0	2.0	2.4	9.9	14.2	0.9	0.9	1.5				D3.3, E3, 北西段	
23	+	+	ナデ、天井部部	SM2.L.1	Ⅱ	2.7	2.5					0.6					D3, S/X位	
24	+	+	ナデ	S2.M1	Ⅱ	2.65	2.35					0.7					D2	
25	+	+		SM2	Ⅱ	2.6	2.4					0.8					D3	
26	+	+	ナデ	S2.M1	Ⅱ	2.4	2.2					1.0					D4	
27	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3	Ⅱ	2.3	2.0	7.7				0.2	0.7				D3	
28	+	+	ナデ、天井部部	SM3.L.2	Ⅱ	3.3	3.2	11.3				0.2	0.3				C3.4 北段部	天井部内面ヘリ部?
29	+	+	ナデ、天井部部	SM2	Ⅱ	3.0	2.8	10.0				0.3	0.7				E3	
30	+	+	内外面ナデ 天井部部 一部ヘリ部	SM3	Ⅱ	8.0				8.9	15.2	3.0					D3	
31	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3.L.2	Ⅱ	0.0				16.0	15.4	1.95					D3	
32	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM2.L.2	Ⅱ	0.2				12.4	17.4	1.7					D4	
33	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3	Ⅱ	3.0				10.6	16.0	2.1					C3.D3	
34	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM2	Ⅱ	2.0				10.6	15.4	1.85					D4	
35	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3	Ⅱ	1.2				11.6	16.4	1.4					E1	
36	+	+	内外面ナデ	SM1.L.1	Ⅱ	2.2				16.2							D4	
37	+	+	内外面ナデ	SM3	Ⅱ	2.0				16.1							焼物同	外周部
38	+	+	内外面ナデ	SM3	Ⅱ	2.0				15.4							D4	
39	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3	Ⅱ	2.0				10.4	14.4	1.6					D3	
40	+	+	内外面ナデ	SM4.L.3	Ⅱ	18.00	8.8	8.8	12.4	12.4	2.1	1.4	0.3	3.8	7.3		D3	
41	+	+	内外面ナデ	SM4.L.3	Ⅱ	7.00	9.4	9.4	11.4	13.0	2.35	0.9	0.4	3.65	4.7		D3.E3	
42	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3	Ⅱ	4.000.08	7.8	8.7	12.0	13.6	1.9	1.7	0.6	4.2	6.4		D3, S/U位	
43	+	+	内外面ナデ	SM2	Ⅱ	1.50.05	7.0	6.9	9.0	11.9	2.56	1.4	0.5	4.46	5.8		D3	
44	+	+	内外面ナデ	S4.M2. L.2	Ⅱ	4.5						3.0	1.8				61.5	外周部埋没
45	+	+	内外面ナデ、天井部部	SM3	Ⅱ									1.5	0.5		D3	
46	+	+	内外面ナデ、天井部部 一部ヘリ部	SM2.L.3	Ⅱ	8.002.09	7.7	8.8	12.4	14.8	2.9	2.3	0.5	5.7	6.7		D3, S/U位	
47	+	+	内外面ナデ	S1	Ⅱ	0.0	6.2	6.9	10.3			0.9	0.75				D3, S/X位	
48	+	+	内外面ナデ	SM3	Ⅱ	0.0	9.2	8.5	11.8			0.8	0.8				D3	外周部
49	+	+	内外面ナデ	SM3	Ⅱ	0.0	8.0	9.0	8.5				0.8				E4	
50	+	+	内外面ナデ、天井部部?	SM2.L.2	Ⅱ	0	0.0	7.4	8.0				0.7				焼物同埋没	遺構、外周部 一部埋没

第18表 四柳白山下遺跡出土土器観察表2

順 号	目 録	器 形	出 土 層	土 器			計 測 値											通関土地点	備 考
				器 種	容 積 (cc)	容 積 (% 容)	A	B	C	D	E	F	G	H	I				
51	調査部	有台付	内外面ナテ	SM2, L2	0	02.8	6.4	7.8					0.5					時西側	
52	+	+	内外面ナテ	SM2	0	(4.8)	9.8	10.0	12.4			0.9	0.4					D4	底面外へ「目」 付部内面側
53	+	+	内外面ナテ	SM2	0	(6.8)	6.8	6.8	9.3			0.7	0.5					A1, D3 ?	
54	+	+	内外面ナテ 付部、底面一部側ナテ	SM3, L2	0	4.0(3.8)	8.9	8.5	9.9	11.8	2.8	0.5	0.5	3.8	6F			D4, E3	
55	+	+	内外面ナテ	SM4, L3	0	(5.8)	7.6	8.8	11.4			1.1	0.4					D4	
56	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	1	2.5(5.0)	7.8	8.7	10.7	12.0	2.3	0.85	0.4	3.45	7F			A1, 3	
57	+	+	内外面ナテ	SM4	0	0.4(8.0)	9.0	8.8	11.4	12.9	1.95	1.1	0.5	3.35	6F			E3	
58	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	1	(4.3)	8.9	8.9				0.45						D4	
59	+	+	内外面ナテ	SM2	1	(5.8)	7.4	8.1	9.2			0.85	0.55					E4	
60	+	+	内外面ナテ	SM2	1	(4.9)	7.7	8.1	11.1			0.8	0.2					D4	外、底面内面 付部、底面側一部
61	+	+	内外面ナテ	SM2	1	1.2(1.4)					2.85	0.85	0.4	3.9	6F			D1, 2	
62	+	+	内外面ナテ 底面側一部側ナテ	SM3, L2	0	0.5(0.9)	7.0	7.2	8.5			0.3	0.45					C4	
63	+	+	内外面ナテ	SM2	0	0.0(0.9)	7.0	7.1	9.6			0.8	0.5					C1	
64	+	+	内外面ナテ	SM1, L3	0	0.2(0.8)	6.8	7.3				0.5						D4 ヲブツレンテ	底面側一部側
65	+	+	内外面ナテ	SM3	1	0.1(0.8)	6.8	8.2	10.5			0.8	0.3					D4	
66	+	+	内外面ナテ	SM4	0	0.0(0.8)	8.4	8.3	11.3			1.3	0.4					SU01, SU02	
67	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	0	6.0(24.8)	8.7	9.4	10.5	12.6	3.0	0.85	0.6	4.25	6F			D4	付部側一部側
68	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	0	(1.0)	6.6	8.0	11.6			0.85	0.4					D4	外側面
69	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	0	(5.9)	8.7	8.8				0.5						C4	
70	+	+	内外面ナテ	SM2	1	(2.6)						0.85	0.25					E3	
71	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	0	(4.9)	8.4	9.2				0.4						D4	底面外へ「目」 付部
72	+	+	内外面ナテ	SM1	0	(4.8)	11.3	11.2				0.55						C4	
73	+	+	内外面ナテ	SM3	1	(6.8)	11.2	10.8				0.6						E4	
74	+	+	内外面ナテ	SM2, L3	0	0.7(0.8)	6.6	7.1	9.3	11.2	3.75	0.8	0.4	4.35	7F			D4	底面側一部側
75	+	底面ナテ	内外面ナテ	SM2, L2	0	2.0	6.8		12.8			2.3	6F					D2, 4	
76	+	+	内外面ナテ	SM2, L1	0		6.0											底面ナテ	
77	+	+	内外面ナテ	SM2	0	1.3	8.0		12.6				3.2	6F				D4	付部、底面内面 一部側
78	+	+	内外面ナテ	SM1, L1	0	8.8	8.9		13.0			2.3	6F					D3, E4	
79	+	+	内外面ナテ	SM2	0	2.8	7.8		12.6			3.35	6F					E3	
80	+	+	内外面ナテ	SM1, L2	1	2.6	8.5		12.4			3.5	6F					D3, SU04	
81	+	+	内外面ナテ	SM2, L3	0	9.0	8.6		14.0			3.6	6F					D4	
82	+	+	内外面ナテ	SM3, L1	1	1.8	9.0		14.3			3.35	6F, 5					C4, D4	
83	+	+	内外面ナテ	SM3, L3	0		8.8											E4	付部側一部側
84	+	+	内外面ナテ	SM2	0		10.2											D3	
85	+	+	内外面ナテ	SM1, L3	0	2.8	7.4		11.3			2.7	5F					C4	
86	+	+	内外面ナテ	SM2, L2	0	2.8	6.8		11.6			3.0	6F					D3	
87	+	+	内外面ナテ	SM2, L1	0		6.8											D3	
88	+	+	内外面ナテ	SM4	0		7.0											D4	
89	+	+	内外面ナテ 付部側一部側ナテ	SM3	0		8.0											C3	
90	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	0		7.4											D4	底面外へ「目」 付部
91	+	+	内外面ナテ	SM2	0		4.2											E2	
92	+	+	内外面ナテ	SM2, L2	0		8.6											D4	
93	+	+	内外面ナテ	SM3, L3	1		6.2											D3	
94	+	+	内外面ナテ	SM3, L2	0	3.0	6.6		12.8			3.2	5F					E3	
95	+	+	内外面ナテ	SM2, L1	1	6.0	7.6		11.8			3.4	6F					D3	
96	+	+	内外面ナテ	SM3, L3	0	4.0	7.4		12.2			2.3	6F					D4	
97	+	+	内外面ナテ	SM4	0	2.5	7.6		12.0			3.8	6F					C4	
98	+	+	内外面ナテ	SM5	1		7.8											E3, 4	
99	+	+	内外面ナテ	SM4, L2	0							2.4	7F ?					E4	

第19表 四稜白山下遺跡出土土器観察表 3

図 号	器 種	器 形	器 名	土			底 径 (mm)	測 量 値									遺跡上地点	備 考	
				器 身 高	口 径	底 径		A	B	C	D	E	F	G	H	I			
100	須恵器	飯鉢	内外面ナテ		SM2,L2	0	0.0	7.6										D3A, SU02	
101	+	+	内外面ナテ		SM2	0	2.2	5.6	12.7					3.8	70.2			D4	
102	+	+	内外面ナテ		SM3,L3	0	21.5	2.8	12.2					4.0	61.5			D3, SU04	
103	+	変?	口縁部内外面ナテ		SM4	1	1.0?		32.4?									D3	内面及び外縁口縁部 焼成
104	+	+	口縁部内外面ナテ 外縁部厚手		SM2	0	2.2		27.0	27.8			2.6		79			D4	外縁部焼成
105	+	変?	口縁部内外面ナテ		SM4	0			6.8?									E3	口縁部外縁部焼成
106	+	+	口縁部内外面ナテ		SM3,L4	0	0.4?		14.8?									B)	
107	+	+	口縁部内外面ナテ		SM1	0	1.5?		13.8?									焼土中	口縁部外縁部焼成
108	+	+	口縁部内外面ナテ		SM3,L1	1	4.7		30.4									C4	口縁部内外面焼成
109	+	+	口縁部内外面ナテ 口縁部厚手ハケメ?		SM2	0	3.5		7.4	9.4			1.9		57			C1,2	口縁部内外面焼成
110	+	+	口縁部内外面ナテ		SM4	1	0.8											B3	口縁部外縁 部焼成火文焼成
111	+	+	口縁部内外面ナテ		S2,M1	0	0.6?											D4	
112	+	変?	口縁部内外面ナテ		SM4,L2	1	1.2		21.5	25.2			2.9		49.5			D3	
113	+	?	内外面ナテ		SM3	0												E4	外縁部焼成
114	+	変	外縁部厚手ナテ 外縁部厚手ナテ		SM2,L2	1												E4	
115	+	+	外縁部厚手ナテ 外縁部厚手ナテ		SM4,L3	1												D4	
116	+	焼成	外縁部厚手ナテ・火文 目、外縁部厚手ナテ		SM4,L2	1												D3	
117	+	変	外縁部厚手ナテ 外縁部厚手ナテ		SM3,L3	1												D4	
118	+	+	外縁部厚手ナテ 外縁部厚手ナテ		SM3,L3	1												E3	
119	+	+	外縁部厚手ナテ 外縁部厚手ナテ		SM2	0												D4	
120	+	厚手	内外面ナテ、外縁部厚手		S2	0	1.0		5.8	13.0	2.55							D4	
121	+	+	内外面ナテ		SM3	1												D3	外縁部焼成
122	+	変?	口縁部内外面ナテ		SM2	0	0.4											E4	
123	+	厚			SM3,L1	0	1.3											E2	
124	+	変(厚)	内外面ナテ		SM2	0												D4	外縁部焼成
125	+	厚(厚)	内外面ナテ		SM2	1	5.1	9.8										A1	
126	+	+	内外面ナテ		SM2	0	5.0	11.2										D3	内外面焼成
127	+	変?	内外面ナテ		S2,M1, L1	0	(7.9)											D4	
128	+	+	内外面ナテ		S2,M1	0												C4,D4,E3	
129	土師器	変	内外面ナテ		SM3,L2	2.0			29.4									C4	
130	+	+	口縁部内外面ハケメ		S2,M2,L1	1.5			29.4									D3, SX-01	
131	+	+	口縁部内外面ナテ 口縁部厚手ナテ		SM3	1.5		17.4	20.5			2.5		47				D4	
132	+	+	口縁部内外面ナテ		SM3,L2	2.3			20.8									変厚手ナテ	
133	+	+	口縁部内外面ナテ		S2,M0	1.5?												E4	
134	+	+	口縁部内外面ハケメ		S1,M2	2.6			20.9										
135	+	+	内外面ナテ		SM3													E2	
136	+	+	口縁部内外面ハケメ 口縁部内外面ナテ		S2,M2													D3	
137	+	+	口縁部内外面ナテ		S2,M2													D3	
138	+	+	口縁部内外面ナテ		SM3	2.4		19.4	23.2			2.7		47				SU04	
139	+	+	口縁部内外面ナテ		SM3													E3焼成	
140	+	+	口縁部内外面ナテ		SM3	1.2		19.0	23.7			1.8		26				C4	
141	+	+	口縁部内外面ナテ		SM2													C4	
142	+	+	口縁部内外面ナテ		S2			16.3	17.7			2.3		67				D3	
143	+	+	口縁部内外面ナテ		SM3				19.3									E2,4	
144	+	+	口縁部内外面ナテ 口縁部内外面ハケメ		S3			16.3	18.6			1.25		57				E3	

写 真 图 版



邑知地溝帯と四柳白山下道路



四柳白山下遺跡俯瞰



第3次調査区遠景（南西より石動山系を望む）



第3次調査区遠景（南東より眉丈山系を望む）



第3次調査区近景（南東から）



重機による表土除去作業（南東から）



人力による掘進作業（南東から）



人力による造橋掘り下げ作業（北東から）



SU05~08検出状況 (東から)



掘り上がったSU05~08 (東から)



D・E-3・4区遺構検出状況（南東から）



掘り上がったD・E-3・4区（南東から）



掘り上がった柱列（北東から）



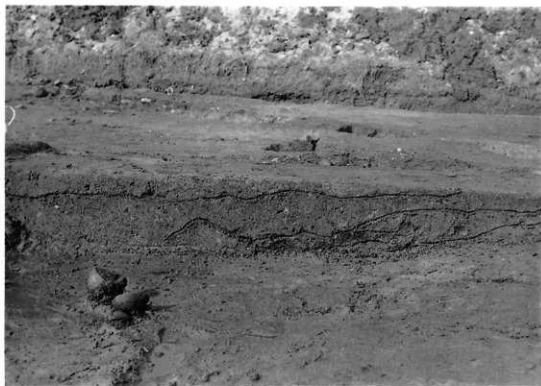
掘り上がった柱列（南東から）



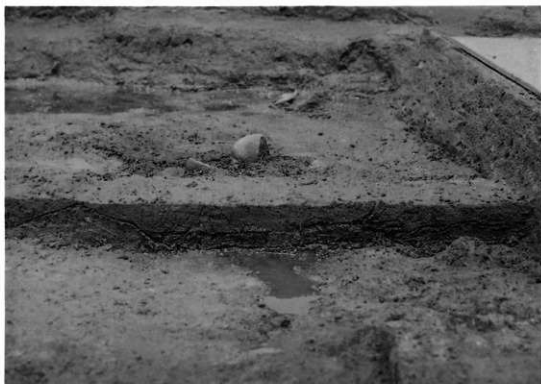
SX01 検出状況（南東から）



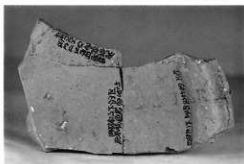
SX01 中心部（北東から）



掘り上がったSX01（西から）



SX01断面（南から）



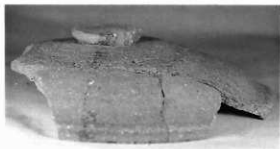
3

7



1

5



14

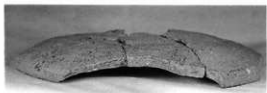
11



16



29



20



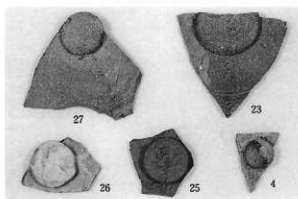
20



31



22



27



23



26



25



4



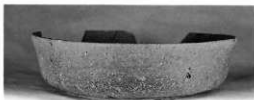
43



42



46



40



51



52



56



67



74



48



77



79



80



81



82



94



95



96



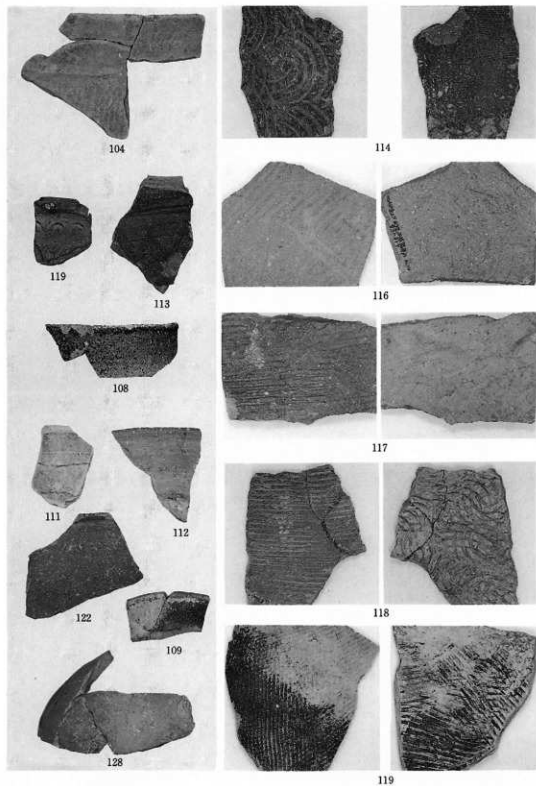
100

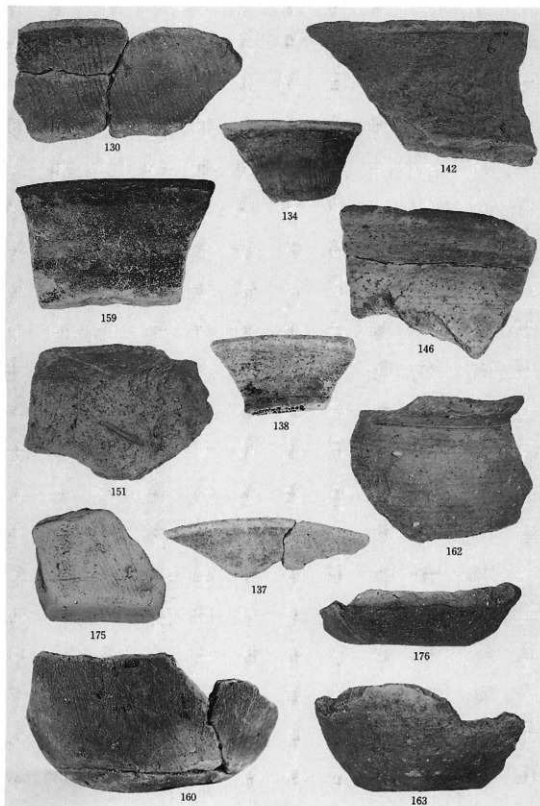


101



102





土師器 甕



177



178



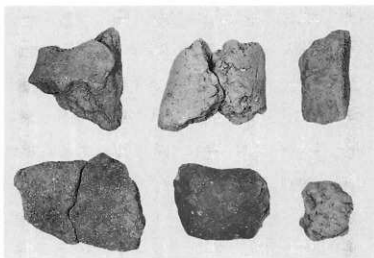
製塩土器



184



185



鑄羽口片



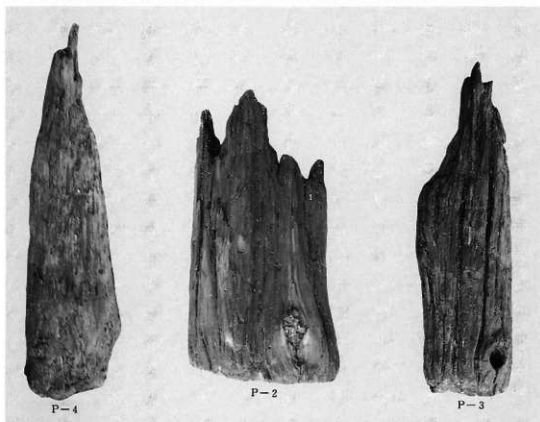
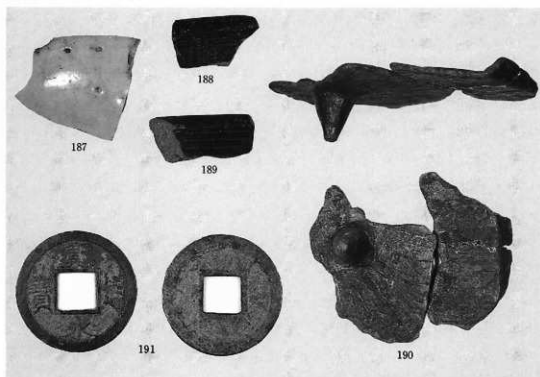
183



182



186



上段-中世から近世の遺物／下段-柱根



【発掘調査参加者】

- 《四柳町》 坂井俊次 坂井晶子 宮田光男 上田正則
 《大町》 浜田 穰 今井 勇 浜田 誓 黒川たまえ 大島とみ子
 《金丸出町》 今井 潔 洛定千里
 《酒井町》 砂田 外次郎 砂田 正子 清水かず子 北田美千子 池田富美子
 川口 敬二 北田茂治 砂田 栄子
 《下曾祢町》 岡山 千代

四柳白山下遺跡Ⅲ

平成6年3月31日発行

編集・発行 石川県羽咋市教育委員会
 石川県羽咋市旭町ア-200番地
 〒925 電話(0767)22-7195

印刷 北陸コロタイプ印刷
